

氏名（本籍）	山崎（柴田）朱音（東京都）		
学位の種類	博士（コーチング学）		
学位記番号	博甲第 7151 号		
学位授与年月	平成26年10月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	創作ダンスの授業における指導言語の特徴とその背後にある知識の構造		
主査	筑波大学教授	博士（コーチング学）	佐野 淳
副査	筑波大学教授		村田 芳子
副査	筑波大学教授	博士（体育科学）	凶子 浩二
副査	筑波大学教授	博士（人間科学）	真田 久
副査	環太平洋大学教授	博士（体育科学）	朝岡 正雄

論文の内容の要旨

(目的)

本論文は、創作ダンスの授業において指導者の知識や経験を含んだ指導力が発揮される指導言語に着目し、3つの研究課題を設定して、指導言語の特徴とその背後にある指導者の知識の構造、さらに発言に至る思考過程を明らかにすることを目的とした。この目的を明らかにすることにより、ダンス指導の未熟な教師が熟練の教師に変容するために必要な知見を得られるとともに、ダンス授業に求められる指導力の解明につながる知見を得られると考える。

(対象と方法)

研究課題1では、ダンス熟練指導者1名による授業の事例（S大の2年分のダンス授業とT大の教材「新聞紙を使った表現」の授業）を対象に、ダンス授業で発言された指導言語と発言に至る熟練指導者の思考の特徴について、学習者に対する質問紙調査・授業における逐語記録・指導者に対するインタビューの3つのデータを収集し、各々の結果を学習者と指導者、発言された教材（場面）の三者の関係性に視点をおき検討した。

研究課題2では、創作ダンスの即興的な表現の指導内容として教材「新聞紙を使った表現」を取り上げ、ダンス指導の未熟練者・熟練者各4名を対象に、指導者の働きかけの異なる2つの指導場面（指導者が新聞紙を操り学習者の多様な動きを引き出す場面と学習者相互に新聞紙を操り・真似た動きに対応して言葉をかけ評価する場面）に限定したダンスの指導実験と指導実験前後に指導者に対するインタビューを行い、未熟練指導者と熟練指導者を比較した。

研究課題3では、研究課題2から得られた結果を基に、創作ダンスに関する知識の内容を整理し具体化するとともに、特に「創作ダンスを通して学ぶ動きの工夫の仕方」の知識、すなわち動きをみる観点について、熟練指導者と未熟練指導者との比較から段階的に提示することを試みた。

(結果)

研究課題1：熟練指導者の指導言語の特徴として、教えたい内容を比喩・隠喩的表現を用いることで学習者の印象に残りやすいものになること、教えたい内容が教材ごとに言葉を変え発言されていること、これらの指導言語の背後には、「取り上げた教材の解釈」、「動きの捉え方」、「動きをみる観点」の3つの視点が含まれていることが明らかになった。さらに、発言に至る思考には、「教材の解釈」と「動きの捉え方」を含んだ「教えたい内容」を指導言語として発し、その後「動きをみる観点」に基づいて学習者の動きを評価し、次の指導言語を瞬時に発するという過程があり、これらを学習者とのやりとりの中で即興的に繰り返していることが示唆された。

研究課題2：教材「新聞紙を使った表現」における未熟練指導者と熟練指導者の指導言語とその意味を比較した結果、ダンスの動きをみる観点は、2つの指導の場面に応じて動きの「誘発」と「強化」の2つの役割を持つことが示唆された。両者の比較から、1)「動きを誘発する観点」では、未熟練者が「新聞紙の動き（形）を真似する動き」を促したのに対し、熟練者は「新聞紙の多様な質感や変化等の特徴を捉えた動きと連続まで含めた動き」を引き出そうとしていた、2)学習者の動きに対応する指導場面では、「動きを強化する観点」に力点が置かれ、その観点として、①動きの質感、②大きく動く、③全身を使う、④空間の変化、⑤時間の変化、⑥力の変化、⑦動きの連続、⑧動きの種類、⑨個性的な動き、⑩なりきるが抽出できた。特に、未熟練者が全身や身体の一部を使った動き、空間の軌跡や高低などの目で捉えやすい③④の観点を中心に指導していたのに対し、熟練者は⑤⑥⑦の定量化しにくい「動きのメリハリ（緩急強弱）やひと流れの動き」の観点も含めた指導をしていることが顕著な違いとして認められた。これらの結果から、指導言語の背後には、取り上げる教材の「教材解釈」と教材に限定されない「創作ダンスを通して学ぶ動きの工夫の仕方」、新たに「教材を通して学ばせたい動き」の3つの知識があり、特に熟練者ではこれらの知識内容が明確かつ多様に存在していることが示唆された。

研究課題3：熟練者・未熟練者それぞれの3つの知識内容の具体化を行い整理した結果、両者を比較すると、「教材解釈」・「教材を通して学ぶ動き」の知識の量の差が顕著であり、未熟練者の「教材解釈」の知識の少なさが「教材を通して学ぶ動き」と「創作ダンスを通して学ぶ動きの工夫の仕方」の知識の少なさに反映していることが推察された。さらに、動きをみる観点の段階化により、未熟練指導者が教材解釈の幅を徐々に広げ、動きをみる観点を増やすことで指導に幅が生まれ、熟練指導者への変容の過程が示唆された。

(考察)

以上の結果から、創作ダンス授業時に指導者が発する指導言語の背後には、創作ダンスに関する「教材解釈」「創作ダンスを通して学ぶ動きの工夫の仕方」「教材を通して学ぶ動き」の3つの知識があり、これらが指導言語に至る思考の過程を形成していることが明らかになった。さらに、熟練指導者と未熟練指導者との比較から、熟練者は、これら3つの知識が多様であり、多くの動きを学習者から誘発・強化し、さらに、学習者の状況に応じた即興的なやり取りが可能になることが示唆され、これらの熟練者の知識の特徴が、創作ダンス指導の未熟練者が熟練に変容していく過程・段階の指標になると結論付けられた。

審査の結果の要旨

(批評)

本論文は、ダンス指導に求められる実践的な指導力を「指導言語」を手がかりに、その背後にある知識の構造や思考過程に着目した点に独自性があり、研究目的に向けて、創作ダンスの授業における熟練指導者による事例の分析、対象指導者を増やし指導内容と場面を限定した指導実験による綿密な計画を練り、膨大なデータを丹念に分析して、熟練指導者の実践知を未熟練指導者との比較から構造的に明らかにした本研究には高い実践的意義が認められ、ダンス指導力の向上が大きな課題となっているダンス教育の発展に寄与することが期待される。

平成26年9月24日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と

判定した。

よって、著者は博士（コーチング学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。